

五十肩を徹底解剖 4

肩の腱は切れてもレントゲンだけでは正しい診断がつきにくい

文
安井謙二
text by Kenji Yasui

「腱板」という肩の腱が切れることで、痛みや動かしづらさが出たのが腱板断裂です。「腱」といえば、みなさんが馴染みやすいのは、ふくらはぎからかかとに伸びるアキレス腱ではないでしょうか？

アキレス腱が切れたとき、よくいわれるのが「『パチッ』という音が聞こえた」「ふくらはぎを棒でたたかれたような感じがして、その場で立っていられ

ずしやがみこんでしまった」など。

明らかな異変のため、アキレス腱を切った人はすぐに病院を訪れます。アキレス腱は足首の後ろの皮膚の下に透けて見えますし、足首の後ろでピンと張った筋がなくなり断裂部分がペコンとへこむので診断も簡単です。

一方、「肩の腱が切れた！」と思って病院に来る人は極めてまれです。切れた瞬間を自覚しづらいだけでなく、腱板断裂のせいで痛くて動かしづ

らいのに、その症状を「五十肩」だと思いつき、長期間、様子を見ていたという人はたくさんいます。さらに最終的に腱板断裂と診断がついた患者さんでも、これまで病院で「五十肩」と診断されてきたという人もたびたび見受けられます。

肩の腱とアキレス腱、同じ腱の断裂でも、だいぶ様相が違いますね。

腱板は、肩の丸みを帯びた外側の筋肉（三角筋といいます）の奥に隠れて位置するので、見たり触ったりが難し

い。骨ではないのでレントゲンに映らず、腱板が断裂していても頑張れば意外とバンザイまでできてしまう。

なんともまぎらわしい特徴がそろっている上、良くも悪くも「五十肩」という言葉は誰しも使っているため、よく分からないときにはとりあえず「五十肩」としておけば患者さんが納得してしまう傾向があります。結果、正しい診断までに時間がかかってしまうのです。

肩が痛くなった経過と診察の具合を組み合わせ、腱板断裂が疑わしい場合には、追加検査として画像診断のMRIを提案しています。

Profile

東京女子医大整形外科で年間3000人超の肩関節疾患の診療と、約1500件の肩関節手術を経験する。現在は山手クリニック（東京・下北沢）など、東京、埼玉、神奈川の複数の医療機関で肩診療を行う。

